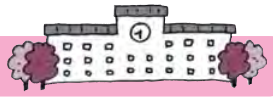
# 地域の素材を活用した教材開発をし子どもの社会性を育む

## 広島県 広島市立千田（せんだ）小学校

### どんな大人になってほしいか

- 社会の一員として、社会に積極的に参画する人。周囲と「共生」しようとする人
- 人の心を豊かに想像する感性を持ち、思いやりのある人
- 「スマートさ」だけでなく、人間味のあふれる人

### そのための小学校の役割



- 子どもが地域の人を介して社会を探究し、生きて働く知恵を獲得し、「社会化」を進められるようにすること
- 小学校６年間を見通し、体系的かつ系統的なカリキュラムを策定し、PDCA サイクルを回して実践を積み重ねること
- 子どもに自分も社会の構成員であることを意識させ、社会参画の活動を体験させること

### 未来に残したい 千田小学校の力強さ

◎継続的な教材開発に努めつつ、数年に１度の研究発表の成果を活用することで、開発教材の教育性を高める

◎役職や経験年数の枠を超え、教師集団がそれぞれの強みを生かして学び合える授業研究の共同体の力を高め、授業の充実に向けてアイデア交流を行っている

広島市立千田小学校校長
**吉竹邦昭** Yoshitake Kuniaki
「教育に感動は不可欠。子どもたちに感動を与える教育を心掛けたい」

広島市立千田小学校教頭
**岡田誠嗣** Okada Seiji
「学んだことを土台に、自分で更に何かを求めていける子どもを育てたい」

**School Data**

| | |
|---|---|
| 設立 | 1924（大正13）年 |
| 校長 | 吉竹邦昭先生 |
| 児童数 | 584人 |
| 学級数 | 22学級（うち特別支援学級3） |
| 所在地 | 〒730-0053<br>広島県広島市中区東千田町2-1-34 |
| TEL | 082-241-8623 |
| URL | http://www.senda-e.edu.city.hiroshima.jp/ |
| 公開研究会 | 2011年11月下旬 |

## 社会参画への意欲と行動の基礎を育む

広島市立千田（せんだ）小学校は、広島市の中心部に位置する。同校には広島大が隣接していたこともあり（現在は東広島市に移転）、文教地区として、今も教育への関心が高い土地柄だ。校区には古くから住んでいる世帯が多く、親子三代にわたって同校に通う家庭もある。地域の人たちが作ったコンクリート製の小さな山やつり橋のあるアスレチックのような遊び場が校庭にあり、地元の人たちに愛されている様子がうかがえる。

校内には、いくつもの被爆した樹木や石、記念碑が残っており、修学旅行で広島を訪れた生徒が立ち寄ることがある（**写真**）。爆心地から同校まではわずか2キロ。当時、多くの子どもが都市部を離れて疎開していたが、残っていた子どもと教師合わせて44人が犠牲になった。毎年8月11日には、同窓会主催による慰霊祭が開かれる。

**写真**　校内にはイチョウやカイヅカイブキなどの「被爆樹木」が多数ある。戦後、地域の協力を得て、校区内にある被爆しながら生き残った樹木を移植した。同校は市内有数の緑豊かな学校となっている

２０１１年度に赴任した吉竹邦昭校長は、子どもの印象を次のように語る。

「本校の子どもの良さは、社会的な出来事に対する関心が高いところです。物事を論理的に解釈する力も高いと感じました。ですから、それらが社会に積極的に参画する姿勢や行動に結び付いてほしいと思っています。そこで、人の生き方を通して、社会を見て、追究できるようにするために、地域にある素材を掘り起こして教材として開発し、授業で実践できればと考えました。真に問題解決の出来る体験学習が充実すれば、子どもたちの社会参画への意欲も高まると思ったのです」

こうした背景から、同校では生活科・社会科を中心に、地域と連携し、地元の素材を生かした教材開発や授業づくりに伝統的に力を入れてきた。１９７１年、92年、２００５年の過去3回、「全国小学校社会科研究協議会研究大会」の会場校になるなど、先進的な教育活動に取り組み続けている。この蓄積を生かしながら、開発教材等の教育性を高める授業づくりを追究している。

## 学習指導要領を読み込み地域の素材に結び付ける

05年の全国大会で同校の研究発表を担当した岡田誠嗣教頭は、「本校で全国大会が開かれるとなると、先生方の意識も大いに高まっていきます」と振り返る。吉竹校長が続ける。

「大会のために研究するわけではありませんし、大会が終わったら熱が冷めていくわけでもありません。本校には、大会を一つの基点にしながら、その成果を組織的に受け継いでいく文化が根付いています」

全国大会は大きな節目ではあるが、他の時期でも教材開発に意欲的に取り組む。10年度は、「自主公開」という形で全国大会での発表と同じように教材開発に取り組んだ。

同校の生活科・社会科の教材開発には、主に三つのポイントがある。一つめは地域素材を活用すること、二つめは実際に教材として役に立ち、かつ単元全体や教科を超えた視点を盛り込むことだ。地元に住む人々、名産品や企業を教材に取り上げることで、子どもは地域への愛着を持つようになる。また、日常生活と関連付けた学習によって、自ら学ぶ意欲を高めることが出来る。

「単に知識だけの物知り博士では、本当の力は付きません。自分で調べたことで分かる楽しさを味わったり、『もっと調べて、こんなことを知りたい』と自分から楽しめるようになった

りすると、中学校、高校に進んでからも学習が楽しいと感じるでしょう」（岡田教頭）

教材開発・研究の過程で更に加味する必要があるのは、単元の幹となる「学習課題」の設定だという。

「調査や見学という具体的な活動や体験に重点を置きながらも、体験して終わり、調べた結果を発表して終わりというのでは、子どもに力が付きません。まず学びの動機付けが必要です。そのために学習課題の設定を一層工夫し、どのような形で子どもに提示すれば学びが深まっていくのかを考えることが大切です。更に、社会科だけではなく、他教科と関連させて総合的な単元にしていく視野も持たなければなりません」（吉竹校長）

教材開発の三つめのポイントは、学習指導要領の内容との関連性について、地域素材を吟味・検討することだ。例えば、岡田教頭は7年前、広島名物お好み焼き用ソースの製造の工夫やメーカーによる違いなどを調べる教材を開発した。これは現在、市内の小学校で使われる副教材に掲載されている。

「この教材を作るに当たり、学習指導要領を何回も読み込みました。学習指導要領のどの部分の力を付けることになるのかを確認するためです。地域にある素材が教材となるかどうかは、素材の中に学習指導要領でねらいとしている内容と一致する点を見つけられるかどうかにあると思います」（岡田教頭）

多忙な中でも、学習指導要領を読まざるを得ない状況をつくることは、授業研究を深める契機の一つになると吉竹校長は指摘する。

「先生方に適度な負荷を掛けていくのも、授業研究の意義だと思います。多忙だからこそ、節目は必要です。研究指定を受けることは、先生方の授業力や教師力向上につながる節目となり、自己実現に迫ることになります。これらが、最終的には子どもたちのためになるのです」

## 子どもにも社会に参加する義務がある

同校が開発した教材の代表例を見ていこう。2年生の生活科「わたしの町のしょう店がい―とび出せ！ 千田たんけんたい―」は、05年の全国大会に向けて練り上げられ、今も続けられている単元だ。1年間を通して、校区にあるタ

図 2年生「わたしの町のしょう店がい」の学習指導計画（全36時間の概要）

＊（ ）内は授業時数

**しる**（17）
- タカノ橋商店街は、どんなところかな（4）
- 自分のお店は、どんなところかな（3）
- 自分のお店を探検しよう（5）

◉ 教えてあげる、わたしのお店（2）
◉ わたしのお店を紹介します（3）

商店街の自分のお店を紹介しよう

**かかわる**（11）
- 「26夜祭」に参加しよう［8月26日］
- 商店街の人の願いや思いは何かな（5）
- わたしたちにできることは、どんなことかな（2）

◉ 応援します　商店街［10月25日］（4）

本物の「5の市」を体験しよう

タカノ橋商店街の「5の市」で、自分たちで準備をして、本物の商品を売ったり買ったりしよう

**つたえる**（8）
- すてきだね、わたしと商店街（2）
- わたしの気持ち、伝えます（5）

◉ 大すきだよ　商店街（1）

商店街の人に、商店街への思いやお礼の気持ちを手紙に書いて商店街に伝えよう

タカノ橋商店街を盛り立てる人々と年間を通してかかわっていく学習を設定。学校の教育活動の柱である授業の一環として、地域の行事をしっかり組み込んでいるのが特徴だ　＊同校の資料を基に編集部で作成

カノ橋商店街とかかわっていく（図）。

街中の商店街が苦戦を強いられている傾向が全国的に見られるが、同商店街では人とのつながりを大切に、消費者の要望に合わせたきめ細かい対応やイベントを行うことで振興を図っている。地域の子どもたちに商店街を好きになってほしいという思いを受けて、同校はさまざまな交流を深めてきた。その結晶として、同商店街を子どもが探検し、人とのかかわり合いの中で地域の人や伝統の良さを発見していく単元を開発した。一時的な交流ではなく、1年間を通して、授業の一環として教育活動に位置付けているのが特徴だと、吉竹校長は話す。

「子どもも社会の構成員です。学びの結果を生かして自分なりに社会に働き掛ける義務があると考え、このような単元を開発しました」

授業では、タカノ橋商店街で毎月5日に開かれる「5の市」に学校として参加し、本物の商品を売ったり買ったりする。また、年3回ほど催される祭りにも参加し、住民とのつながり、絆を深める。商店街との連携は年間を通して続くため、商店街側にも相当な協力を得ることになるが、子どもから元気と希望をもらえると、毎年快く受け入れてくれるという。

「子どもが必要性を感じない見学やイベントでは、意味がありません。子どもたちにとって必然性のある見学や調査で、多くの発見、実感や納得が得られ、先生方もそれが認識できるからこそ、続いているのだと思います」（吉竹校長）

吉竹校長は着任早々、社会科の授業の導入部分の模擬授業を行った。より良い授業づくりのためには、役職や経験年数の枠を超えて、教師全員がそれぞれの得意分野を皆で共有し、自分に足りないものを互いに補い合い、高め合うことが大切だと考えるからだ。

「先生方には子どもがわくわくするような授業をしていこうといつも語り掛けています。縁あって同じ職場にいる仲間です。校内研究は、意見交流を通して、授業力を含む教師力を互いに耕す場でもあります。まさに、自分たちの財産です。また、信頼関係や人間関係が深まっていく絶好の機会となるでしょう。若い先生方に伝えるべきことをしっかりと伝えていくことも私たちの役目です。それが若い先生を大事に育てるということだと思います」（吉竹校長）

育てたい大人像と
そのための小学校の役割

## 教師が得意分野を共有し人間味あふれる人を育てる

今後の課題は、市が全校に設置した50インチのモニターや電子黒板といったICT機器の活用だ。例えば、子どもが作った作品を資料にし、提示したり比較したりする時にICTを活用できる。ただし、それを適切なタイミングと使い方で活用するためには、まだまだ研究が必要だ。ICTの活用は、言語活動の充実と関連させて考えることがポイントだという。

「言語活動は、体験などを通して学んだことを更に深めるための重要な手段の一つであり、ICTは、その効果を更に高めるツールです」（岡田教頭）

更に、6年間の教育課程の充実にも力を注ぎたいと考えている。

「小学校6年間でどう学びを積み上げていくかを考え、そのための中身を充実させる必要があります。更には、小中連携を強め、小中9年間をどうカリキュラム化していくかも今後の課題です」（吉竹校長）

人とのかかわり、地域とのかかわりを深める6年間を土台にして人間味のある大人になってほしいと、吉竹校長は語る。

「効率の良さや学力はもちろん必要ですが、社会の一員として、周りの人と共生し、社会に積極的に参画できる人間、人間臭くてたくましい人間、人の心を想像できる人間になってほしいと思います。例えば、電車やバスで立っている高齢者を見かけても、見て見ぬ振りをすることや、その存在にすら気付かない子どもが増えているように感じます。人に関心を持ち、人の気持ちを想像する感性が育っていないのではないかと危惧しています。学校でも行事が精選され、効率性が求められるようになる中、たとえ時間が掛かっても、子どもたちにとって本物の知恵になり得るような営みを大切にした教育活動を行っていきたいと思います」